

21世紀に向け、先進的経営体を育成

市では、21世紀に向け、先進的な農業経営に取り組み農業者を育成し、若者にとって魅力ある農業・農村を築くことを目標に「白根市農業振興計画（アグリアクション21）」を策定しました。アグリアクションには、激変する農業（アグリ）情勢に対応し、目標を持って行動（アクション）するという意味が込められています。



若者にとって魅力ある農業・農村づくり

野菜を中心とした輸入農産物の自由化、食糧法の施行によるコメの生産・流通・消費システムの変化。農業情勢は、近年大きく変わってきています。こうした状況のもとで、白根市の農業を振興させるため、市では「白根市農業振興計画（アグリアクション21）」を策定しました。

計画では、今後十年間の白根市の農業を見据えた基本目標を設定し、これをもとに、平成九年度から十三年度までの五カ年の実施計画を定めています。

計画のメインテーマは、若者にとって魅力ある農業・農村づくり。農業従事者の高齢化、担い手不足が進む中、若者が夢を持って就農できるような生活環境の整備、企業の経営の推進、ブランド化の確立など、二十一世紀に向けた先進的な農業経営を目指して施策を展開していきます。

具体的な施策方向

快適な

農村生活の推進
農業・農村を、若者にとって魅力あるものにするためには、働く上での環境整備が欠かせません。

家族間にも休日制・給料制などの労働協定を導入、事務所の設置、OAの導入など若者が就業意欲を持てる環境と効率的な経営管理を推進します。また、農村のイメージアップと配偶者対策も兼ねて若者や女性の意見を取り入れながら魅力的な農家住宅を提案します。

そのほか、災害に強い農業基盤を確立するため、排水路の改修などの基盤整備事業を計画的に推進していきます。

人材の育成

農業に意欲のある人材を育成・確保するために各種研修を支援するほか、農業者同士の交流を促進します。

また、園芸作物の規模拡大に伴って労働力を確保するため、人材バンクなどを設立し、パート・アルバイトの雇用など労働力の確保を図ります。

先進的経営体の育成

白根市の基幹作物であるコメの価格の低迷が今後も予想される中、農業所得を増やすためには、コメの生産規模の拡大と生産コストの低減、園芸作物の一層の振興が課題になります。

このためには、個別の大規模経営農家や協業組織の育成と農地の流動化を促進しなければなりません。そこで、企業の経営を目指す

農業者に対して、徹底した経営の数値化と管理を推進し、経営者の養成を進めます。さらに、農地の管理検査ができるコンピュータシステムの導入などを検討します。

また、七年度から進めている認定農業者制度をPRし、啓発活動を展開していきます。さらに認定農業者を支援する経営改善支援センターの機能を強化し、農業者が専門的な相談に対応できる人材の設置や運営についての検討を進めます。

消費者交流としろねブランドの確立

食用菊の「かきのもと」、西洋ナシの「ル・レクチエ」など全国に誇れる農産物を「しろねブランド」として確立するようPR・販売を推進していきます。そのために、マーケティングを徹底して研究する専門委員会を設け、農産商品のブランド化を進める戦略を計画します。

さらに、これらの農産物を効果的にPRし、消費者交流もできるようレストラン・即売所を備えた「フルーツ・フラワーパーク」の建設を検討します。

このほか、付加価値の高い農産加工商品の開発を有望品目に絞って推進していきます。

※計画についての問い合わせは市役所農政課農政係（☎373・2111①233、234）へ

菜々子ちゃんの成長と共に 白根市発展に期待

人口4万人都市誕生記念植樹



▲記念植樹する笠原雄二さん（右から3人目）と里子さん（右から4人目）。

昭子（魚町） 本永（古川） 浩秋（古川） 敬称略 ※

四月二日に白根市の人口が四万人に到達。これを記念して、記念植樹と四万人達成認定証授与式が十六日に市役所で行われました。この日は、四万人目の市民で三月二十一日に生まれたばかりの笠原菜々子ちゃん（上塩俵）も、お母さんの里子さんに抱かれて来庁。市役所前で、笠原さんや竹内市長らによってハナミズキが植えられ、その後、お父さんの笠原雄二さんに認定証と、越後白根風絵の会から風が贈られました。

「人口4万人到達日当てクイズ」クイズの正解は四月二日でした。抽選の結果、次の五人の方に五千円分の図書券を差し上げます。田中武（味方村） 田辺ツネ（東町） 渡辺豊子（穂波町） 小野



財政事情と市民の夢と…

連載・見えてきた拠点（仮称）生涯学習センター①

図書館、文化ホール、中央公民館、青年教育センター、理科センターなどを統合し、新たな市民学習の拠点として期待が高まる（仮称）生涯学習センター。今、この構想が徐々に具現化してきています。

市総合計画の前期の目玉事業として掲げられたこの構想ですが、市民からは「一体、どんな施設か分からない」といった声がかかれます。「市は財政状況が厳しいと言っているのに、大丈夫なのか」という疑問の声さえあります。

生涯学習センター構想は、どのようにして浮上してきたのでしょうか。そして私たち市民は、新たな施設をどのように生かしていくのでしょうか。これまでの経過を振り返りながら、生涯学習センターの真に進むべき方向を、シリーズで考えてみたいと思います。



▲現在の図書館。利用者は増加の一途。昨年度は約6万冊が貸し出された。

■財政事情

今年の三月市議会でも市側は、生涯学習センターの建設事業費として約六億円（用地買収費、造成工事費）を九年度予算案に計上しました。議会では「財政改革が叫ばれている折り、もっと慎重に審議すべき」との声が上がり、「センター建設に係る事項を審査する」という、生涯学習センター建設事業特別検討委員会（五十嵐仁一郎委員長・ほか議員九人）が発足。市側と議会側が意見の一致を見ないまま、予算は原案どおり可決されました。

財政状況について竹内市長は「建設は総合計画の中で十分検討し、財政計画を立てて進めています。よほどのことが起こらない限り対応できます」としています。

「予想される総事業費は約三十五億円」（企画財政課）という新施設が市財政にとって大きな負担であることは確かです。ですがそれ以上に白根市では、各種の社会教育施設の老朽化、文化施設の整備の立ち遅れなどが目立ち、市行政が手を付けなければならないことが何年も前から山積してきま

■文化施設

「もう何年も前から、新しい図書館を造ってほしいと何度となく市にはお願いしてきましたねえ」。小山敏矢さん（道湯）は農業を営む傍ら、図書館協議会長を長年にわたって務めてきました。そのほか、教育センターや中央公民館の運営委員なども歴任。青年団の団長を務めたこともあり、市の社会教育をさまざまな角度から見つめ、そして携わってきました。

「白根市って文化的な施設が何もないでしょ。お隣の加茂市だって素晴らしい図書館があるのに。白根市にもあんな施設があったらいいですよ」。そんな夢を持っていた小山さんは、平成五年八月、図書館を利用する人々と共に、新図書館の建設について市長を交えて話し合う機会を得ます。それは竹内市長が就任して始まった市民と市長の対話集会「語るう夢大地21 談・談・トーク」でした。